

# アメリカニズム

— アメリカ英語と、その文化的な背景 —<sup>1</sup>

Americanism: American English, and its Cultural Background

横 田 和 憲

Kazunori YOKOTA

## 序

日ごろ何気無く使っている外来語を見直してみると、日本でも、アメリカ英語からの借用語が如何に多いかということに気づく。コンビニ、グレープフルーツゼリー、ウインドブレーカー、ジーンズ、パソコン、レイアウト、ノウハウ（本稿の2の最後でも言及する）、ジंकス、チェックアウト、ベストセラー、ステイプラー、ミュージカル、ヒップ・ホップ、リズム・アンド・ブルースなど、など。アメリカという大地でアメリカ英語が、新種の造語を如何に馥郁と、かつ、ふくよかに実らせてきたかということが、身近なこれらアメリカ英語からの借用語を見ても良く分かる。今や、このアメリカ英語を抜いてのコミュニケーションなど、日本語の場合には想像もつかないことだと思われる。

Mitford M. Mathews はアメリカ英語 (Americanism) を簡潔に "A word or expression originating in the U. S." と定義しているが、具体的には①アメリカで作られた新語、②アメリカで英語化した借用語、③アメリカで新しい意味を与えられた語を指すことになる。アメリカは広大な国土や、海外からの移民の絶えざる増加などによってサラ

ダボールと形容される状況を呈し、多彩の中の統一性、統一の中の多彩性を保持しようとするがために、文化多元主義 (Cultural Pluralism) や多文化主義 (Multiculturalism) という問題を抱えている。アメリカの紙幣や貨幣に刻まれているラテン語「多彩の統一」(E Pluribus Unum [=One from (out of) Many]) を一つの国家理念エトス (Ethos) とするアメリカが、言語をその統一の一手段とし、さらに世界語としての中核的な役割を担おうとしているのがアメリカ英語なのだ。

多彩な地域、国家理念エトス、多彩な民族の観点から多彩なアメリカ英語を眺め、その文化的な背景の一側面を垣間見てみたい。アメリカ英語とは何かを主題に据え、以下の観点到添ってその成立と特質を考察しながら、アメリカ英語とその背景となるアメリカ文化について考えてみる。まず、広く、アメリカニズム (Americanism あるいは Americanness) とは何なのかについての考察から始め、アメリカニズムの一般的な定義、言語としてのアメリカニズムであるアメリカ英語について考えてみる。次にアメリカの国家理念エトスについて幾つかのトピックをテーマにして論を進めながら、地理的かつ民族的

な多彩性の観点から、多彩な地域言葉や人種的な曼陀羅の観点からアメリカ英語を眺めてみる。最後に、その他のアメリカニズムとして、詐欺師 (Conman) などのアメリカ英語について考察する。

## 1 アメリカニズム

アメリカニズムについての一般的な定義としては、「アメリカニズムとは、ヨーロッパの政治・社会体制や価値観とは異なる、新大陸アメリカの政治、宗教、言語、文化、風土などの領域における固有の価値観、思想、信条、生活様式などを表わす言葉で、その現れ方は、時代によって変化している」(早瀬 iii) という定義に従いたい、特にアメリカニズムの概念が時代によって変化しているという点に留意したい。

また政治と宗教という語順にも留意したい。神政政治という政教一致の政治体制 (Theocracy) に関しては「アメリカが宗教的な人工国家であること、それも宗教上のロマン派たるプロテスタンティズムを基盤に、さらにその過激派思想ともいべきピューリタニズムの思想を理念として掲げた神政一致のコンミュニオンとして出発したこと、そして20世紀が終わろうとしている今日 [すでに私たちは21世紀に存在している] においてなお、そうしたエートスはアメリカの無意識界をおおっていること、こうしたアメリカの根にゴシック的な感性と引き合うものがある」(千石 637; [ ] は筆者 (以下同)) という示唆的な言説がある。近代ヨーロッパの後を継いだアメリカは、当初から、現在の矛盾と未来への可能性を如実に孕んでいたと思われる。

現在の矛盾と未来への可能性については、TULIP という頭文字 (Total depravity, Unconditioned election, Limited atonement,

Irresistible grace, Perseverance of the saints) で要約されるピューリタニズム (あるいはカルヴィニズム) の五箇条 (Calvinist Five Points) からなる神との (ときには「切る」とも表現される) 厳しい契約のことや、アメリカ土着の神話 (「エデンの神話 (Myth of Edenic Possibilities)」, 「アメリカのアダム (American Adam)」, 「成功の夢 (Dream of Success)」, 「エデンの喪失 (Loss of Edenic Innocence)」) のことが想起される。また、アメリカにとって過去はタブーであり未来こそが重要な指針であること (特に一世のアメリカ人にとっては) は、「自立するということが、アメリカの場合には、もっと正確に言うといギリスに発端をもつアメリカの場合には、同時に自分自身の過去から離脱するという点でもあった。ナショナルであろうとすることが、外国の絆からはなれておのれ自身の過去に還帰することを意味せず、むしろ離脱すべきものが母国でありおのれ自身の過去であったというアメリカの事情は、当然のことながら、いわばその自立の代償として、アメリカを過去を持たぬ現在、蔭に包まれぬ白光の世界に限定してしまう」(酒本 462) という言説からも分かる。

国家理念エトスと深く関わる思想的なアメリカニズムであるが、時代の変遷とともに大きく様変わりし、「[アメリカの]「内部」に「他者」をかかえこんだ [アメリカ] 文化の無意識、集団の思考法、支配の様式や言説のことを、サイードの「オリエンタリズム」にならって「アメリカニズム」と呼び直し、・・・」(八木 337) という言説も現れる。ここで言及されているオリエンタリズムという言葉は、一般的には「東洋趣味」と解される言葉であるが、言説内の Edward W. Said (1935-2003) が *Orientalism* (1978) で意図しているのは、「欧米が中東を見るとき

み、見下し」のことである。この意に添ったアメリカニズムからは、先住民 (Native Americans) を始めとした文化多元主義あるいは多文化主義と表現される動向と、アメリカの主流と考えられて来た WASP (White Anglo-Saxon Protestant [それに加えて、恐らく、Male]) の抱く根強い支配意志との間で繰り広げられる、白人優越主義に基づく人種差別意識 (Racism) に由来する軋轢が如実に浮かび上がって来る。この軋轢が、第 43 代ブッシュ大統領が 2 期目を迎えることが決定した今、共和・民主の両党に分かれた二つのアメリカの混迷にさらなる拍車を掛けることになるであろう。

さて、言語としてのアメリカニズムであるアメリカ英語については、繰り返すが、Mitford M. Mathews が *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles* で、アメリカ英語 (Americanism) を "A word or expression originating in the U. S." と簡潔かつ限定的に定義している。具体的には①アメリカで作られた新語、②アメリカで英語化した借用語、③アメリカで新しい意味を与えられた語、の 3 点となる。英語が世界に誇る最大最良の英語辞典 *Oxford English Dictionary (OED)* は、歴史的原理に基づいて文献上に現れたあらゆる語を収録し、語形・語義を具に提示しているが、アメリカにも、歴史的原理に基づいたアメリカ英語辞典が二つ存在する。*A Dictionary of American English (DAE; 1938~44)* と *A Dictionary of Americanisms (DA; 1951)* の二つだが、前者は、W. A. Craigie がシカゴ大学に招かれて作り上げたもので (ちなみに、Craigie は同書で、"Americanism" を "words, phrases, and idioms peculiar to American usage" と定義している)、後者は、Craigie の編集助手を長年にわたって

動めあげた Mitford M. Mathews が、DAE の方針 — 他の英語変種よりも、アメリカ英語でより広く用いられている語や表現をも包含している — に対し、これらを排除して、"Americanism" を前述の "A word or expression originating in the U. S." と「アメリカに起源を有する語・句・意義」と限定し、より凝縮した形での歴史的原理に基づくアメリカ英語辞典の編纂を意図した辞典である。もう一つの重要な辞典として *English Dialect Dictionary (1896~1905)* が有ることを申し添えておきたい。<sup>2</sup>

アメリカ英語の多義性については、〈年齢、性別、職歴、階級、民族、居住地域〉、〈共時的、通時的、歴史的な事象〉、〈動植物、インディアン文化、開拓時の事物〉、〈技術用語 (例えば海洋語; Herman Melville などの諸作品に詳しい)、略語、スポーツ用語〉、〈掲示、広告、看板、小説、新聞、雑誌、書籍、日記、放送、大統領選のスローガン〉、〈俗語 (スラング Slang) つまり大衆言語 (ポピュラー・スピーチ)〉、〈卑語 (誤用、商標、キャッチフレーズ、ニックネーム、発明、など)〉、〈隠語 (キャント Cant, 例えば監獄などでの Underworld Lingo)〉、などの項目が挙げられる。訛り、すなわち方言に関しては、発音、綴り、アクセント、文体などが考慮されねばならないことは自明であるが、広大な土地を持つアメリカであれば、当然のことながら、その西と東では、同じアメリカ英語でも大きな方言差が生じている。各種の母音における地域差は言うまでもないことであるが、発音については、例えば a-tall (=at all) に関して、"The a is pronounced like the name of the first letter of the alphabet, and both syllables are stressed" (Calvin S. Brown, *A Glossary of Faulkner' South*) に対し、Wentworth

は先ず一般的な発音を示した上で、州別、人種別の発音を明記している。

アメリカ英語は世界各地に広がり、誇張して言えば、好むと好まざるとに係わらず誰もがアメリカ英語の中で暮らしているという現実に直面せざるを得ない。このアメリカ英語の特性について考えるに当たり、まず、ピジン・イングリッシュ (Pidgin English) の視点から考察を始めたい。そもそもピジンとは "The different kinds of pidgin English have preserved the basic grammatical features of English, at the same time incorporating a number of non-English syntactical characteristics. The great majority of words in pidgin English are of English origin, but there are also Malay, Chinese, and Portuguese elements." ["それをしゃべる誰にとっても母語ではない混成共通語で、その文法は単純、その語彙は、しばしば多言語からなるが、極めて限定された語彙である。ピジン・イングリッシュを例に取れば、これは極東の港で、主としてイギリス人と中国人の間の取り引きに用いられた語彙である。基礎となるイギリス英語の語彙にマレーシア語、中国語、ポルトガル語の要素が加わる"] (拙訳) (Harris 2145) と定義できる。アメリカ英語と国際英語、あるいは世界各地の英語のことを思い起こせば、ピジンが世界を踊り回るという現況が鮮やかに浮かび上がってくる。この説明から推察すればアメリカ英語もイギリス英語の一方言に他ならないということにもなる。

だが、そもそも英語排撃の先鋒となった問題の書、ソルボンヌ大学の文学教授エチアンブル (René Etiemble (1909~2001)) の『君はフ랑グレを話しますか』 (*Parlez-vous Français?*, 1964) も、裏返して見てみれば、「英語かぶれしたフランス語」が問

題化するほどに英語が広がっていることの証明にもなる。さらに英語そのものの中にも認められており、「アメリカかぶれした英語」の浸潤が正統な英語の存立を危うくしそうだ、という強い危惧が存在している。アメリカ英語のイギリス英語への浸透から始まり、英米共通の段階を経、さらに歩を進めて「アメリカ主・イギリス従」の現状から生じる危惧であるが、これは、アメリカが国際間に国家として占める重要な地位が大きな要因となっている。

アメリカ英語には、①古風性 (Archaism) と②現代性 (Modernism) という、二つの相反する特性がある。①古風性に関しては、アメリカの本来のエトスとは矛盾するかも知れないが、実は、アメリカにおいては WASP の存在が、抜き差し難く、生まれ、育ち、毛並みの良さ、上層社会に対する渴望、といった暗黙の潜在意識 (無意識) として影を落としている存在しているのだろう。アメリカに最初にもちこまれた 17 世紀初頭の英語は、Elizabeth 一世 (1558~1603) および James 一世 (1603~25) 時代の英語、つまり、大体シェークスピアや欽定訳聖書における英語であり、ボストン周辺や、ニューイングランド地域で、標準的なアメリカ英語としての地歩を固めていた。独立後の、18 世紀のアメリカ英語も、合衆国英語 (Federal English) や Noah Webster の綴字法 (綴字法) の改良をも含め、19 初頭までは、18 世紀のイギリス英語を正統な英語と見なし、それによって自国の国語の姿を正しくしようとする試みであった。現代のアメリカ英語にもその時代の英語の名残りが幾分かは認められる。例えば、"He took his sister along." の "along" は「ある人をつれて」あるいは「友として」の意であるが、イギリス英語では今では廃れてしまい専らアメリカ英語の用法となっている。

シェークスピアや欽定訳聖書以来のイギリス英語そのものの変遷があり、その変遷を見極めた上で、アメリカ英語がイギリス英語の語法に如何なる影響を与えつつあるのかを、明確に実証する必要がある。

②現代性については、アメリカ英語の独自性が明確になってきた時期が、口語体の文章で文学作品が書かれ始めてからだという事実を踏まえたい。アメリカでは毎年3,000ないしはそれ以上の新語が造り出されていると言われているが、このこととは別に語法の面においても、自由奔放なアメリカ人気質を反映してか、柔軟性に富んだ言葉の用い方が見られ、イギリス英語を足掛かりとして独自の語法が造り出されている。アメリカ英語はイギリス英語の単なる延長ではなく、イギリス人の移住者以外の多民族から構成される曼陀羅の混交から、「言葉のサラダボール (坩堝, モザイク)」とも言うべきアメリカ独自の英語が生まれてきた。アメリカ独自の特色とは、先に述べたピジン的 (あるいはクレオール的だとも表現できる) な原則、つまり、文法の単純化 (Simplification) であり、それに伴う、例えば冠詞の省略とか前置詞の省略という、文脈依存度の増大だと言える。さらに次の特徴を挙げておきたい。イギリスでは既に廃語となったか、あるいは方言にのみ残っている単語が、いまだに広く用いられていること。品詞の別にこだわらないで、自由に他の働きをさせること。動詞+副詞から作った名詞の多いこと。動詞+副詞という動詞句の多いこと。ある種の接尾語が新語を作る上で活発な役割を果たしていること。頭辞語 (acronyms) の多いこと、などである。

## 2 エトス

多彩なアメリカ英語を育む多様なアメリカであるが、多様性の統一を図る必要があるア

メリカにおいては、多様性を保ちながら如何にして国家として一つのアメリカを統一するかという課題が独立当初からの難問であった。そこで、アメリカ英語の文化的な背景となる、思想的なアメリカニズムを具現するアメリカの国家理念エトスについて幾つかの側面から考えてみたい。まず1ドル紙幣<sup>3</sup>に内包されている表象を読み解くという観点から論を進め、次にアメリカの3つのイデオロギーについて、さらにアメリカのヒーローたちについて考察してみる。

1873年ごろに発行された1ドル紙幣 (ちなみに、1ドル銀貨は1935年の発行) には、1782年に採用された国璽 (The Great Seal of the United States) の面印と裏印が刻まれているが、ここにはアメリカのエトスに係わる深い意味が内包されている。最初は、数字の13にまつわる意義である。アメリカの国鳥 (ちなみに国花は薔薇) である白頭鷲 (White Bald Eagle) に絡むオリーブの葉、矢、星の数は全て13で統一されている。独立13州に由来する13という数字がアメリカにとって如何に重要な数字であるかが伺える。最下段に MDCCLXXVI (=1776、アメリカ独立の年号) が記されているピラミッドの階層数は、もちろん、13。ちなみに、NOVOS ORDO SECLORUM=A New Order of the Ages (永代の新秩序) は『アエネーイス (Aeneis)』の著者であるローマの詩人ヴァーギル (Virgil, 70-19 BC) からの引用であり、ANNUIT COEPTIS=The Year Began (神はわれらが企てを嘉 (よし) みたまう) の文字も刻まれている。さらに、白頭鷲の頭部を飾る帯に刻まれた、先にも記したラテン語 E PLURIBUS UNUM [=ONE FROM (OUT OF) MANY [=13 Statets]] の文字に注目したい。地域や人種の曼陀羅を統一すべき一つのシンボルとして、

各種コイン (1c [penny], 5c [nickle], 10c [dime], 25c [quarter], etc.) に刻み込まれたモットーでもある (志村 300-301)。

またピラミッド頂頭の一つ目に焦点を当ててみると、実はこの図が、アメリカでは 1733 年 (ロンドンでは1717年) にボストンで設立されたフリーメーソン (Freemason) の「全てを見透す眼球」(All-seeing Eye) であることが分かる。フリーメーソンの墓石とも酷似している。フリーメーソンとは、もともと西欧の石工ギルドであり、社交・平等・友愛・平和をモットーにした組織であるが、アメリカでは約 400万人の会員組織を形成し、過去には、ある意味でアメリカ人の心を揺さぶる理想像である Benjamin Franklin を始め、諸大統領 Washington, Jefferson, F. D. Roosevelt, L. B. Johnson, G. R. Ford, Reaganm などともフリーメーソンであったと言われている。さらに想像を逞しくすれば、19 世紀のアメリカ・ルネサンス期を代表する作家の一人であるエマソン (Ralph Waldo Emerson (1803-82)) の "Nature" (1836) (『自然』) に描かれている "... Standing on the bare ground, — my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space, — all mean egotism vanishes. I become a transparent eye-ball. I am nothing. I see all. The currents of the Universal Being circulated through me; I am part or particle of God. ..." [「・・・むき出しの大地に立ち、— 頭をさわやかな大気に洗われて、かぎりない空間のさなかに昂然ともたげれば— いっさいの卑しい自己執念は消え失せる。わたしは一個の透明な眼球になる。いまやわたしは無、わたしにはいっさいが見え、「普遍者」の流れがわたしの全身をめぐる、わたしは完全に神の一部だ。・・・」(拙訳)] (Emerson 1109; イタリアックは原文・訳文

とも筆者) という言葉を戯画化した画家クランチ (Christopher Pearse Cranch) の「透明な眼球 (The Transparent Eyeball)」のことも想起される。

アメリカの独立革命期のその萌芽が育まれた、アメリカ人自身の自己像やアメリカの国家理念エトスを構築する3つのイデオロギーについては、次の言説が示唆的である。「・・・アメリカが神の寵愛のもとでユニークな国として発展してきて、世界の手本となったという第一のイデオロギーは、領土、名声、国力を伸張させてきた日の出の勢いの帝国としてのアメリカという第二の思想に通じるのである。・・・アメリカは、自由の擁護者としての世界的使命が負託された自由の聖地であるという考え方が、第三のイデオロギーである」(岡部 38-39)。そして「これら三つはそれぞれが相互補完関係を保っていて、一つのイデオロギーはかならず他の二つを同時に暗示する・・・」(岡部 39) と続く。統一のための精神的な絆として、貨幣や紙幣、国旗とともに、民族・職種・地域別に、実在・非実在にかかわらず、アメリカ人の心の一つの支えとなる多彩なヒーローたちがいることも見逃せない。(斉藤 404-405)

坂下昇氏と蟻二郎氏の言説を敷衍しながら、地域と民族に係わる多彩なアメリカ英語について、論を進めていきたい。まず多彩なアメリカ英語の実態を<地域>の観点から眺めてみる。広大なアメリカの地理的分割には幾つもの分け方があるだろうが、本稿では、便宜上、9つの地域に区分けしてみる。ミネソタ (Minnesota) 州のイタスカ (Itasca) 湖を源流とされているミシシッピ川を大きな目安として、西部から順に、50の州に Washington D. C. を加えた以下の区域となる。<sup>4</sup> (1)大平洋岸 (Pacific) 地域 — 5つの州: Washington, Oregon, California,

Alaska, Hawaii (2) 山岳 (Mountain) 地域 — 8つの州: Montana, Idaho, Wyoming, Nevada, Utah, Colorado, Arizona, New Mexico (3) 中央北西部 (North West Central) 地域 — 7つの州: North Dakota, South Dakota, Minnesota, Nebraska, Iowa, Kansas, Missouri (4) 中央南西部 (South West Central) 地域 — 4つの州: Oklahoma, Arkansas, Texas, Louisiana (5) 中央北東部 (North East Central) 地域 — 5つの州: Wisconsin, Michigan, Illinois, Indiana, Ohio (6) 中央南東部 (South East Central) 地域 — 4つの州: Kentucky, Tennessee, Mississippi, Alabama (7) ニューイングランド (New England) 地域 — 6つの州: Maine, New Hampshire, Vermont, Massachusetts, Connecticut, Rhode Island (8) 大西洋中部 (Middle Atlantic) 地域 — 3つの州: New York, Pennsylvania, New Jersey (9) 大西洋南部 (South Atlantic) 地域 — 8つの州 + Washington D. C.: West Virginia, Virginia, Maryland, Delaware, North Carolina, South Carolina, Georgia, Florida。(3)~(6)を合わせて広く中西部と呼ぶこともある。

アメリカ英語を多彩な地域言葉の観点から眺めてみる時、通例、地域意識を含めての地域言葉を「パトワ (Patois) [フランス語で「ぎこちない話し方」の意から; 国なまり, 方言]」という名で総称する。パトワは風変わりで根強いものでもあり、発音, 綴り, アクセントなど、つい地が出てしまうという代物である。自動車高速道路の呼び名を例に取ってみたい。・Turnpike — ニューヨーク州からヴァージニア州一帯 (1791年の大昔からあった名称) ・Freeway — カリフォルニアとテキサス ・Speedway — シカゴ近郊

・Expressway — オクラホマ, ミシガン  
 ・Highway — キャンザス。高速ではないが, Broadway, Main Street, Drive (Riverside Drive [New York City]), Parkway (両側や中央分離帯に樹木や芝生を植えた大通り), Boulevard (blvd. 大通, Sunset Boulevard [Los Angeles]) などが列挙される。ちなみに, アメリカの高速道路の数字表示は, 基本的に, 偶数が東西方向を, 奇数が南北方向を示している。

河に関しては, ・Brook — 北東部 ・Creek, Run — 南東部 ・River — 西部の大河; 支流が Branch; そのまた支流が Stream; 澱みが Bayou; 岬が Point; 谷が Canyon; そのまた小さいのが Wash (水, 波の打ち寄せ), となる。樹木に目を向けると, ・Aloma (ポプラ) — Cottonwood (棉の木) ・Platan (Sycamore) (プラタナス [フィラデルフィア]) — Buttonwood (ボタン木 [ミシシッピー]), 時刻に関して言えば, 大草原では Sunrise, Sunset ではなく, Sunup, Sundown を使う。

酒に絡んだ表現では, 1855年のケンタッキー生まれの Straight (ストレート) や Bar-keep; Bar-tender; Tavern; Saloon; Bar などのアメリカ語が思い起こされる。汽車については, (Day) Coach (普通客車), Parlor (特別客車), Car (すべての種類の鉄道車両客車, 貨車), Smoker (喫煙車), Club (多機能の客車), Sleeper (あるいは Pullman [考案者名]) car (寝台車), などが有る。なお, 客車は Passenger car, 軌道車は streetcar あるいは tramcar と言う。

多様性の統一を図る上で, サラダボール・アメリカあるいはモザイク・アメリカの多様性はアメリカにアメリカ独自の積極的な価値観を与えている。America as a Multicultural Society: How America Benefits from

Religious, Racial and Ethnic Diversity という講演名が示しているように、多様性はアメリカの一つの大きな強みになっている。民族の曼陀羅を担う租界（コロニー）の状況の観点からアメリカ英語を眺めて見るとき、合衆国のどの地域に、またどの州に、どの民族が租界、つまり中心となって居住しているかを確認することは不可欠である。<sup>5</sup> そのために、アメリカの民族の曼陀羅を縮図化している New York City（別称はゴサム (Gotham)）とも言う。イギリス中部の村ゴータムとの関わりと共に、アメリカ文学の父とも言われる Washington Irving (1783~1859) の言葉に由来する) について、セントラル・パーク南東ぶち<sup>6</sup>を基点にし、Pei 氏の記述を踏まえて精査をしてみる。

• Turks, Armenians, Syrians: Walk three blocks east, to Lexington Avenue, then down to 34th Street, and continue on down to 23rd.  
 • Czechs, Poles, Hungarians: Up the East Side, preferably on Third or Second Avenue, to 72nd Street and beyond.  
 • A heavy German population: The Yorkville section.  
 • The Italians: Go on beyond 86th Street to 110th.  
 • Negro Harlem: Turn west again at 116th, and walk a block or two.  
 • American Jews, Puerto Ricans [Spanish Halem]: Continue to Amsterdam Avenue, and go down the West Side.  
 • Arabs: The lower end of Manhattan on the Hudson River side.  
 • Chinese, Jews, more Italians: The lower end of Manhattan on the East River side.  
 • Scandinavians: Across the river in Brooklyn.

アメリカ英語を、民族の曼陀羅模様の夢を解きほぐす手立てとして、どんな民族がどんな言葉をまるでサラダボールの坩堝あるいはモザイクに投げ込み、それがどんな模様をア

メリカニズムに与えているかについて考えてみたい。英語の主潮は、大河が小川の混流を許しながらも滔々たる流れを変えないように、注ぎ込む各民族のエトスをも取り入れ、同化させていった。そしてまた、流れのあちこちに澱みができるように、言語にはかなり判然とした離れ小島が生じた。

例えば渾名<sup>あだな</sup>に的を絞ってみたい。アイルランド: Hillbilly (田舎者), Cracker (粘土食い), Trash (くず), Turkey (酒焼の怒った顔)。Hibernia — アイルランドの雅語。Erin go brath — アーリン・ガ・ブロー「アイルランドよ、永遠なれ」。Harry Callaghan alias Dirty Harry — Clint Eastwood。Molly Maguire — 「マグワイヤ姐御」。英国では収税吏を恐喝するための秘密結社。アメリカでは炭坑労働者たちの組織。アイリッシュ英語。英語らしからぬ語法を見たら、まず、アイリッシュと思えばいい。It's lying you are. (おまえ嘘ついてるんだな)。I am after going to the door. (おれが、ちょうど、戸を閉めにいこうとしていると)。Phat is it ye name? スコッチ: アイリッシュとは犬猿の仲。Molly Maguire の摘発に暗躍した私立探偵ピンカートン氏はスコットランド系。中欧 — ハンガリー (Hunky), ポーランド (Polak), ボヘミア (Bohunk), イタリア (Dago, Wop), フランス (Frog 蛙, Tadpole おたまじゃくし), など。スペイン: (Greaser 油差し; ペラペラ, シャベる)。パンチョ (毛布), ソンブレロ (帽子), キャフェテリア, ランチョ (牧場), ロデオ (荒馬乗り競技会), サイロ (穀物倉庫), クカラッチャ (Cockroach ゴキブリ) など。中国: (Chink, John)。ドイツ: (Dutch — 「ドイッチェ」の訛ったもので、オランダ人ではないことに注意)。Hold on 「待て」 — ドイツ語の halt an



の転化であろう。Delicatessen; Make it a take-out. アメリカ版の「出前」。オランダ：特にニューヨークに強い。ニッカーボッカー (オランダ系移民の子孫)。特に強い d 音 (th)。汽車の車掌の連呼「ヌッフ！」— Newark; new は noo と発音する。黒人：(Sambo, Quimbo)。Buckra (白人), Voodoo (まじない), Hoochy-coochy (幽霊), Moochy (乞食)。強いアフリカ音と FFV (First Family of Virginia の略で、オールド・サウスの上流階級) の発音や語彙。Ole Virginny (オール・フォージニと発音する)。ひっかかるような口調に、濡れた喉舌音と鼻音が利いていて流暢な節回しに聞こえるが、どこか発音の止ったような話法。技術革新に不可欠の文字「ノウハウ」の初出 (1833 年のある新聞記事), "'No, no, Massa', replied the gentleman from Africa, 'charge  $\phi$  50 for killing, and  $\phi$  50 for the know how.'" (殺しに50, 覚えた腕に50いただきやす)。

### 3 詐欺師など

アメリカ英語に特有な表現として、一つの例を挙げれば、詐欺師 (The Confidence Man, 略して Conman) がある。「有栖川」宮家、下手な作品よりもよほど巧妙に仕立て上げられた筋書きの「おれおれ、振り込め詐欺」など、世間を騒がせている詐欺師たちである。傾聴に値する言説がある。「悪党 (ピカレスク) の味を持つ道化師が、メシヤの口説 (くぜつ) を語りつつ、口当たりのいい「アラゾン」(誇張) の天才と、魔術師さながらの芸術性を備えるとき、そこに登場するのがアメリカニズム特有の Confidence Man (信用詐欺師), 略して「コンマン」である。この型の香具師こうぐしは信用の果実よりは、信用ゲームそのもの、つまり「信頼 (トラスト)」を楽

しむ風がある。これを略して、「コンゲーム」という」(坂下 88)。

Mitford M. Mathews の *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles* を精査してみると、「con」の項は先ず、こう始まる。"… n. Short for 'confidence,' used in **con game, con man**; see **confidence game, confidence man**. *Slang*." その後に "**con game, con man**" に係わる用例が4つ続く。直ぐ, "… v. [f. prec.] *tr.* To swindle, dupe. *Slang*." と記載され、3つの用例が明示されている。次に, "**confidence game, confidence man**" の各々について、「confidence」の項を手掛かりにしながら、詳細な記述を跡付けてみる。この項は "… n. *attrib.* Designating swindlers and swindling operations in which advantage is taken of the victim's confidence, as (1) **confidence game**, (2) **line**, (3) **man**, (4) **operator**, (5) **sharp**, (6) **woman**. Cf. **con**, n." という記述から始まり、(1) "**confidence game**" については 1856年 (*Spirit of Age* (Sacramento) 14 Mar. 4/1 G. W. Meylert's now about town, playing the confidence game and making grand attempts at swindling.) と 1947年 (*Steamboat* (Colo.) *Pilot* 9 Jan. I/8 It was decided not to press confidence ggame charge in district court) の事例が、(3) "**confidence man**" については 1849 (*N. O. Picayune* 2I July I/4 'Well, then,' continues the 'confidence man,' 'just lend me your watch till to-morrow.') と 1948 (*Dly. Racing Form* (Chi.) 29 June 2/3 He had a reputation and justly so, for keeping tours, confidence men and other undersirables off the race tracks.) 年の事例があげられている。

なぜ欺瞞 (Deception) が見抜けないのか、という本質的な問い掛けに対しては、人間で

あるが故の弱点——欲、傲慢や、認識能力（何が真実なのかを見抜く能力）の限界や、十人十色、などの要因が推察できる。真実が視界に浮かび上がることは、まず無く、その背後に身を潜めている。Confidence という言葉には「信頼」、「信仰」、「確信」などの意味があり、これらの意味を具現する詐欺師は、「悪党 (Knaves)」、「道化 (Fool)」、「天才 (Genius)」でもある。「道化」は、自己詐欺に陥る芸術家でなくてもならず、人の信頼を得て喜びを感じる。Joseph Glover Baldwin (1815~64), *The Flush Times of Alabama and Mississippi* (1853) からの引用を交えた次の言説には注目すべきである。「『彼の嘘は魂の偉大、精神の統合性から生まれた嘘だった。彼の燃えたぎる天才にとっては、真実はあまりに瑣末だった。彼の記憶力は偉大で、己の嘘の輪郭をすべて記憶していたから、そこから作り出す虚構はさらに偉大だった。すべての観念が事実だった。彼は口舌だけの虚構に依り頼むことなく、行為においても嘘をついた。彼の沈黙すらが嘘だった。』もはや、つけ加えることもないまでにアメリカニズムの闇を暴露した文章である。」(坂下 89)

コンマンの系譜を辿ってみると、歴史に現れる「コンマン」は、Confidence Man という新語とともに、1849年7月7日付けの『ヘラルド』が嚆矢であり、アメリカ文学では、ほら吹き信用詐欺師の元祖の一人として名高い Captain Simon Suggs が1845年に登場している。Johnson Jones Hooper (1815~62), *Some Adventures of Captain Simon Suggs* (1845) が描く Suggs はモットーとして "It is good to be shifty in a new country." を掲げますが、この "Shifty" の意味は "Shifty means here not just striking hard bargains, American style, but getting away from the crush of

history, the enfeeblements of cultivation." ["ここで "Shifty" が意味するのは、いわゆるアメリカン・スタイルの叩き売りではなく、歴史の、つまり、文明の衰弱からの離脱を意味している。](拙訳)] (Howe 50) という言説に集約されているかも知れない。ペテン、まやかし、まがいものを表わすアメリカ英語は枚挙に遑が無い。<sup>7</sup>

## 結

アメリカ英語について幾つかの面から考察を試みてきたが、国家としてのアメリカニズムが変遷していくように、アメリカ英語そのものが年ごとに3,000語を目処にした新語が造り出される状況の中で絶え間なく変遷していることを鑑みれば、アメリカ英語についての考察に果てしは無いことは自明であり、それも踏まえて今後の課題を記しておきたい。

- ・アメリカ英語に関わるその他のトピックについての考察。
- ・アメリカ文学に的を絞ったアメリカ英語についての考察。具体的にはアメリカ文学の諸作品を方言の面から切ってみること、さらに、俗語、卑語、などの面から切って作業が不可欠である。
- ・アメリカ社会の深層を探るには格好の犯罪小説についての考察。お尋ね者、宝石泥棒、詐欺師、銀行強盗、興行師、などや、犯罪の手口、刑務所内のしきたり（牢名主への贈り物など）、警察の取り調べ、犯罪者の心理など。この点については Eric Partridge, *Dictionary of the Underworld*, 1950. と Hyman E. Goldin, *Dictionary of American Underworld Lingo*, 1983. が有用である。
- ・アメリカ英語内の発音、綴り、アクセントなどの違いに関して、さらに、年齢、性別、職歴、階級、民族、居住地域や、共時的、通時的、歴史的な事象についての考察。

・イギリス英語の絡みでは、シェークスピア以来のイギリス英語の変遷、様々なイギリス英語を精査しながらどのイギリス英語がアメリカ英語の基礎となったのかを見極めるべき途方も無い作業が必要である。

・アメリカ英語とイギリス英語との比較に関しては、アメリカ英語のイギリス英語への影響、またイギリス英語との語法（アメリカ英語の特色を示す have の用法については、疑問文・否定文を作る時には、助動詞 do が用いられる、など）、発音（例えば above に見られるように、母音についてはイギリス英語の方がアメリカ英語よりもはっきり聞き取れる、などや、早口で崩れた発音をするアメリカ英語の都会的な特徴、も有る）、綴り（-er と -re (center, theater など; neuter, acre は同じ); -or と -our (color, honor, labor; glamour は同じ); その他: organize, traveler.), アクセント、語彙 (Vocabulary ボキャブラリー)、文形成・統語 (Syntax シンタクス)、語形成・形態 (Morphology モフォロジー)、などの差違。

・最後になるが、日本を含めた諸国からの借用語としてのアメリカ英語にも、注目しなければならない。さらにイロコイ (Iroquois) 五 (六) 部族連合の合議制がアメリカ議会のモデルとなり、1ドル紙幣などに刻み込まれているアメリカの国紋章の13本の矢をくわえた白頭鷲こそ、6本の矢をくわえた白頭鷲というイロコイ部族連合の表象を模したものである事実に鑑み、先住民ネイティブ・アメリカンからのアメリカ英語への貢献についての考察が、アメリカ英語の実像を把握するためには不可欠であることを申し添えておきたい。

## 注

- 1 本稿は、2003 (平成15) 年12月6日に発表した<金城学院大学・2003年度・後期エクステンション・プログラム主題講座 (英語英米文化学科) : ようこそ! 素晴らしき英語の世界へ! (Welcome to the Wonderful World of English!) — 0泊10日 英語英米文化の旅 [第9回] 「アメリカニズム — アメリカ英語と、その文化的な背景」>、ならびに2004 (平成16) 年6月15日に発表した<愛知学院大学・語学研究所・講演会「多彩なアメリカ英語 — 地域・エトス・民族」>に、加筆訂正したものである。併せて、特に<坂下昇著『アメリカニズム — 言葉と気質』(岩波書店, 1979 [岩波新書 (黄版82)])>と<蟻二郎著『帰らざるウエスタン』(晶文社, 1977)>は、アメリカ英語についての考察に必読書であることを記しておきたい。
- 2 辞書、辞典、事典の宿命であるが、出版時にはすでに実情と合わず、口語らしからぬ硬い表現 (つまり、「生きた」アメリカ英語ではない、ということだ) や、死語 (廢語、古語) の宝庫と化してしまう事情を甘んじて享受せねばならない傾向にある。だが、現在では使われていない言葉についても、かつては一般的であった言葉には実に興味深いエピソードや物語が絡み合っていることを見逃してはならない。そこで、目に付いたものだけで (特に最新の辞典に関しては) 不十分なリストではあるが一応、文法、地域方言、俗語、発音、人種別に APPENDIX として最後に記しておいたので、必要であれば、是非ご活用いただければ幸甚である。
- 3 1ドル紙幣 (本来、紙幣などの類いの複写は禁止されているが、敢えて記載しておきたい)
- 4 分割の線を入れてアメリカ全土の9分割地図を示しておく。(出典は大橋)
- 5 州別の人種構成を示すための地図を示し、さらに、民族 (政治的な動向に伴って消滅した民族名も含む) 別の州名を添えておきたい。(出典は Kennedy)
  - ・ Armenians (California)
  - ・ Belgians (Michigan, New York)
  - ・ Bulgarians (Indiana)
  - ・ Canadians (Maine)
  - ・ Chinese (California, Hawaii)
  - ・ Cubans (Florida)

- Czechoslovaks (Nebraska, Ohio)
  - Danish (Iowa, South Dakota, Utah)
  - Dutch (Iowa, Michigan, Minnesota, New York, South Dakota, Utah)
  - English (Alabama, Arkansas, Connecticut, Georgia, Idaho, Maine, Massachusetts, Mississippi, North Carolina, Oklahoma, Tennessee, West Virginia, Wyoming, Utah)
  - Finnish (Michigan, Minnesota, Oregon, Washington)
  - French (California, Kentucky, Louisiana, Maryland, New Hampshire, Pennsylvania, Rhode Island, South Carolina, Texas)
  - Germans (Arkansas, Colorado, Kansas, Missouri, Nebraska, North Dakota, Ohio, Oklahoma, South Dakota, Wisconsin)
  - Greeks (Florida, New York)
  - Hungarians (Illinois, Missouri, Ohio)
  - Irish (Massachusetts, New York, Wisconsin)
  - Italians (California, Maine, Massachusetts, New Jersey, New York, Rhode Island)
  - Japanese (California, Hawaii, Oregon, Washington)
  - Lithuanians (Illinois)
  - Mexicans (Arizona, California, New Mexico, Texas)
  - Norwegians (Minnesota, North Dakota, Oregon, Washington)
  - Polish (Connecticut, Illinois, Michigan, New Jersey, New York, Pennsylvania)
  - Portuguese (Maine)
  - Rumanians (California, Michigan, Ohio)
  - Russians (Illinois, New York, North Dakota)
  - Scots (Utah, Wyoming)
  - Spanish (Arizona, California, Colorado, Florida, New Mexico, Texas)
  - Swedish (Delaware, Illinois, Minnesota, North Dakota, Oregon, Utah, Washington)
  - Swiss (California, Idaho, Kentucky, Utah, Wisconsin)
  - Syrians (Michigan)
  - Ukrainians (Pennsylvania)
  - Yugoslavs (Indiana, Montana, Pennsylvania)
- 6 セントラル・パーク南詰めの地点を含め Manhattan の拡大図を示しておく。(出典は Pei)
- 7 正統英語ではコンマンは Imposter, Swindler, Cheat・bounty-jumper — 「一時金飛び」(軍)。  
 ・Bogus — 「まやかし」。この語は辞典学者よりは社会学者の領域である, と言う言語学者 (Evans) もいる。古い由来を持ち, 昔オハイオにいた贋金作りの装置の名から起ったものである。  
 ・Skulduggery — ミネソタ。「手のつけられない」ペテン術。  
 ・Bunco-artist — カロライナ。詐欺師の名に由来し, 暗黒街で使われる「芸術家」。  
 ・Yankee peddler (e=Connecticut yankee) — コネチカット。アメリカ版ガマの油売り。ナツメグが薬用になるところから, 木に緑色のペンキを塗って売り歩いた wooden nutmeg の伝承に由来する。  
 ・Shoddyocracy — 「イカサマ万能の世相」  
 ・Phony — 「にせもの」。20 世紀の語。語源すら異説紛々。  
 ・Fake — 「がらくた, 詐欺師」。即興でごまかす。コネチカット生まれ。  
 ・Loan shark — 「マフィアによるサラ金」。金融ばくり屋。大草原時代からの土地投機業者の呼び名に由来。  
 ・Snook — 「ちょろまかし」。ヘブライ系。大統領ニクソンが愛用。  
 ・Booster — 「万引き」  
 ・Fixe — 賄賂で刑の軽減を図る。  
 ・Humbug — 「おべんちゃら」。  
 ・Moonshine — 「ちゃらんぼらん」。西部奥地の密造酒の名に由来。  
 ・Trickster — 「小手先使いのペテン師」  
 ・Claptrap — 「だぼら」。ひどい淋病持ちに由来。  
 ・Sell — 「大当たり」。一杯喰わせて人気を取るの意に由来。  
 ・Bluff — 「コケおどし」。ポーカーの虚勢に由来。  
 ・Shyster — 「悪徳弁護士, 三百代言」。ニューヨーク出自のドイツ系アメリカニズム。早くもメルヴィルの作品中に見える。  
 ・Wheeler-dealer — 「金融の策士」。頭の回転が早く, 巧妙な取引をする。  
 ・Culture peddler — 文化番組のスポンサーを冷やかしたりする。  
 ・Hooky — 「盗み」。ヒッピー語。  
 ・Clip-joint — 日本の暴力酒場(ぼったくり)に当たる。  
 ・Baloney — 「がせねた」。ソーセージに由来。(坂下 94~96)

Works Cited

- 蟻二郎. 『帰らざるウエスタン』. 晶文社, 1977.
- Emerson, Ralph Waldo. "Nature." *The Norton Anthology of American Literature*, Nina Baym et. al. ed., 6th edition, Volume B (New York; W. W. Norton): 1103-34.
- Harris, William H. & Judith S. Levey, eds. *The New Columbia Encyclopedia*. New York: Columbia UP, 1975.
- Howe, Irving. "The Note of Wonder in American Writing" (*Dialogue*, 1977): 49-57.
- 早瀬博範 他 (編). 『21世紀から見るアメリカ文学史 — アメリカニズムの変容』. 英宝社, 2003.
- 金敷力 他 (編). 『アメリカ文学を読む30回』. 太陽社, 1997; 1981.
- Kennedy, John F. *A Nation of Immigrants* ([『自由を求めた人々』 西尾朗 (編注)]. 成美堂, 1966; 1976.
- 大橋吉之輔 他 (編). 『総説アメリカ文学史資料編』. 研究社, 1979.
- 岡部朗一. 『政治コミュニケーション』. 有斐閣, 1992.
- Pei, Mario. *The American Heritage* ([『アメリカ文化の背景』 雨宮剛他 (編注)]. 成美堂, 1973; 1981.
- 斉藤眞 他 (編). 『アメリカを知る事典』. 平凡社, 1986; 2000.
- 坂下昇. 『アメリカニズム — 言葉と気質』. 岩波書店, 1979 [岩波新書 (黄版82)].
- 酒本雅之. 「『直面』の主題 — アメリカ・ルネッサンスを中心に」. 『英語青年』1970: 462-463.
- 千石英世. 「八木敏雄著『アメリカン・ゴシックの水脈』 [書評]」. 『英語青年』1993: 637-8.
- 志村正雄. 「アメリカ文学と神秘主義(4)」. 『英語青年』1988: 300-301.
- 八木敏雄. 「インディアンをアリアドネーの糸にして」. 『英語青年』1995: 337-339.
- Language*, 1789.
- John R. Bartlett, *Dictionary of Americanism*, 1848; 59; 60; 77.
- Schele de Vere, *Americanisms: The English of the New World*, 1872.
- John Farmer, *Americanism Old and New*, 1889
- Sylva Clapin, *A New Dictionary of Americanisms*, 1902.
- Richard H. Thornton, *An American Glossary*, 3 vols., 1913.
- Gilbert Tucker, *American English*, 1921.
- George Krapp, *The English Language in America*, 2 vols., 1925.
- Mitford M. Mathews, *The Beginnings of American English*, 1931.
- H. W. Horwill, *A Dictionary of Modern American Usage*, 1935.
- Sir William A. Craigie & James R. Hulbert, *A Dictionary of American English on Historical Principles*, 1936~44.
- H. L. Mencken, *The American Language*, 1936~48.
- Noah Webster, *New International Dictionary*, 1950.
- Simeon Potter, *Our Language*, 1950.
- Mitford M. Mathews, *Dictionary of Americanisms on Historical Principles*, 1951.
- Partridge & Clark, *British and American English*, 1951.
- Thomas Pyles, *Words and Ways of American English*, 1952.
- M. Nicholson, *A Dictionary of American English Usage* [Based on F. G. Fowler's *A Dictionary of Modern English Usage* (1926)], 1957.

\* DIALECT

- Hans Kurath, *Handbook of the Linguistic Geography of New England*, 1939.
- ———, *A Word Geography of the Eastern United States*, 1949.
- Bagby Atwood, *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States*, 1953.

APPENDIX

アメリカ英語に関する辞書について幾つか発行年代順に列挙しておきたい。

@洋書

\* GENERAL

- Noah Webster, *Dissertations on the English*

- Mitford M. Mathews, *Some Sources of Southernisms*, 1948.
- Harold Wentworth, *American Dialect Dictionary*, 1944.
- G. V. Carey, *American into English*, 1953.
- Frederic G. Cassidy & Joan Houston Hall, *Dictionary of American Regional English*, 4 vols., 1985~2002.
- 『アメリカ北部英語方言の研究』(Books Academia). インターナショナル・アイ・ネットワーク.

\* 俗語

- 『アメリカ俗語辞典』, 朝日出版.
- 『俗語が語るニューヨーク』, DHC 出版事業部.

\* 人種

- 『「黒人英語」の構造 — 概説 (「動詞」編)』.  
中部日本教育文化会.

\* SLANG

- Eric Partridge, *Dictionary of Slang*, 1936.
- Van Den Bark, *The American Thesaurus of Slang*, 1942.
- Eric Partridge, *Usage and Abuse*, 1942.
- ———, *Dictionary of the Underworld*, 1950.
- ———, *Slang Today and Yesterday*, 1950.
- Hyman E. Goldin, *Dictionary of American Underworld Lingo*, 1983.

\* PRONUNCIATION

- J. S. Kenyon & T. A. Knott, *A Pronouncing Dictionary of American English*, 1944.
- Kenneth Pike, *Intonation of American English*, 1945.
- C. K. Thomas, *Introduction to American Pronunciation*, 1947.
- Daniel Jones, *An English Pronouncing Dictionary*, 1950.
- J. S. Kenyon, *American Pronunciation*, 1950.

@和書

\* 一般

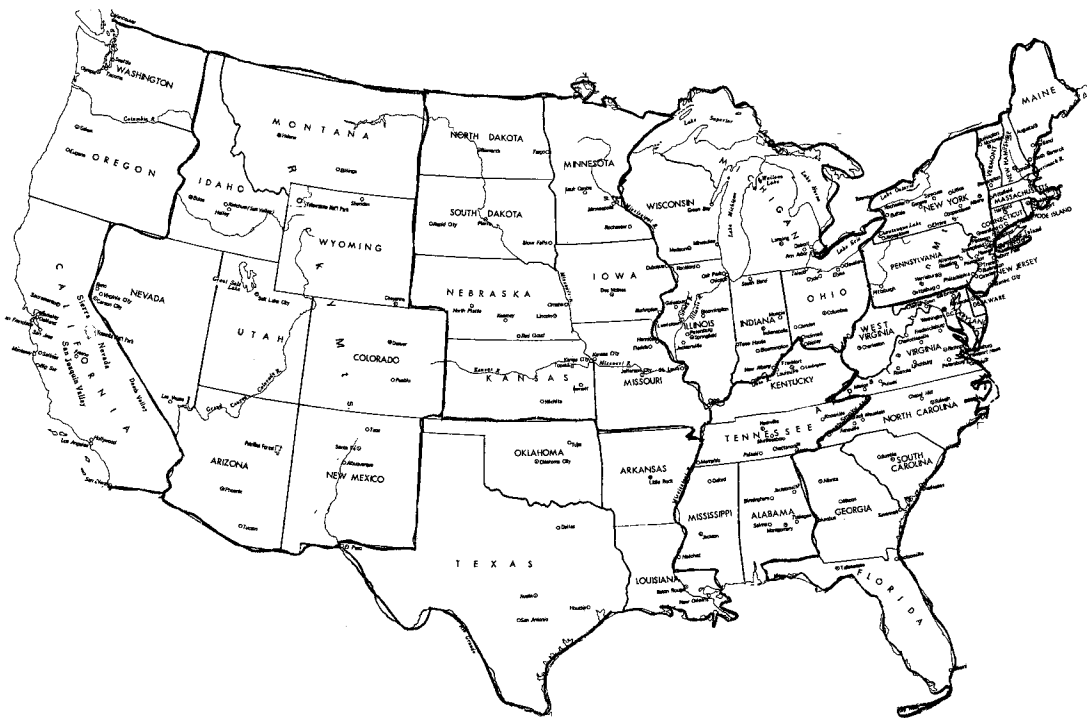
- 『アメリカ語法事典』, 大修館.
- 『日米口語辞典』, 朝日出版.
- 『アメリカ口語辞典』, 朝日出版.
- 『アメリカ英語』, 南雲堂.
- 『アメリカ英語最新ビジュアル辞典』, 研究社.
- 『アメリカ州別文化事典』, 清水書院.

\* 方言

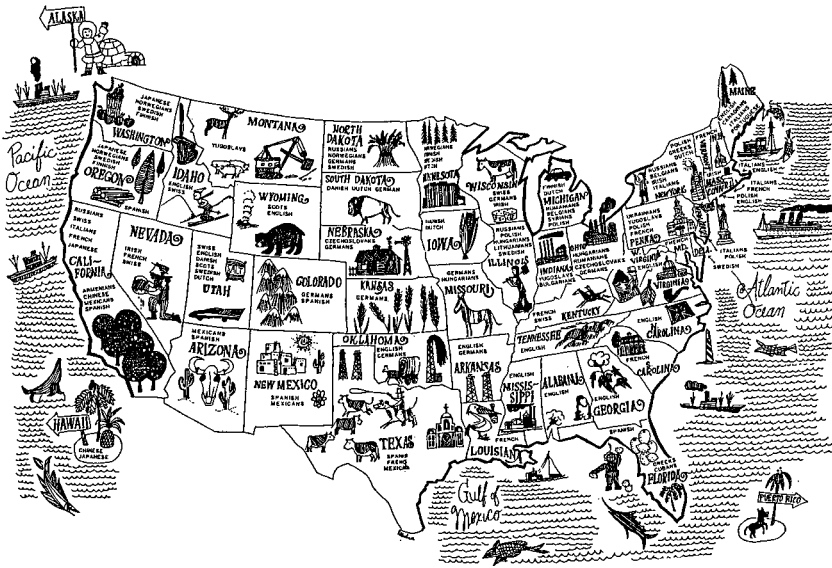
- 『アメリカの文学方言辞典』, オセアニア出版.
- 『文学作品にみるアメリカ南部方言の語法』,  
三修社.
- 『アメリカ・ウェスタン辞典』, 研究社.
- 『ニューヨーク情報辞典』, 研究社.



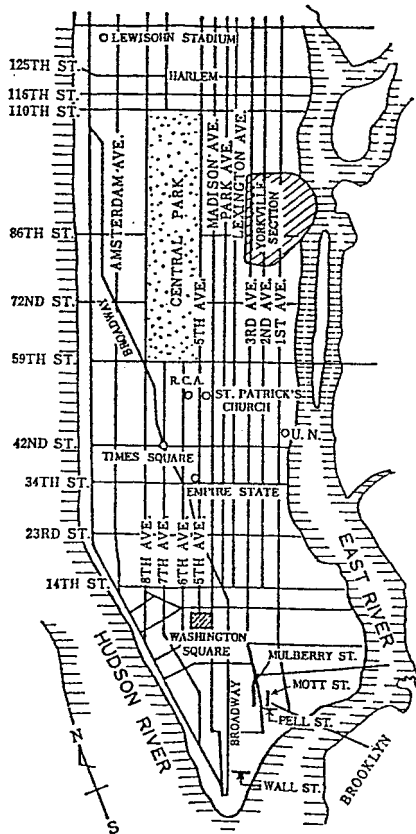
注 3



注 4



注5



注6